

林政ジャーナル

No.34

2003年 3月20日

日本林政ジャーナリストの会

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-9-13

三会堂ビル 日本林業協会内

TEL 090-5541-6891

FAX 047-444-0135

禁無断転載

活動計画など決定

第25回定期総会報告

2月19日午後5時半から霞ヶ関の法曹会館で、第25回（平成14年度）定期総会を開催した。総会は、①第1号議案2002年度活動報告、②第2号議案2002年度決算報告並びに監査報告、③第3号議案2003年度活動計画、④第4号議案2003年度予算、⑤第5号議案、任期満了に伴う役委員改選、の各議案を審議しいずれも原案通り決定した。

2002年度 活動報告

研究会は、「森林と環境」を年間テーマに次の通り8回開催した。

◎3月7日「森林と環境」藤森隆郎氏（日本林業技術協会）

◎4月25日「森林における生物多様性」鷲谷いづみ氏（東京大学教授）

◎5月27日「住環境と木材」木村志朗氏（名古屋大学教授）

◎6月5日「ポルトガルにおける杉林の管理」アルメイダ・リスボン工科大学助教授

◎6月7日「現地研究会・塩那森林管理署における森林教育の取組と枝打ち体験他」

◎6月25日「地球温暖化防止対策と日本林業の取組」林野庁森林管理部長石島操氏

◎9月4日「アフタンの森の管理と森林教育」

C・Wニコル氏

◎10月20日「森林経営と環境」森林業・田中惣次氏

共同取材は、11月13日～15日まで、宮崎県の森林・林業木材産業を取材した。松形知事から、杉丸太を中国に輸出する問題に関して福建省当局と覚書に調印した報告並びに輸出構想などについて説明を受けた。また、林業及び木材産業のリーダーたちと懇談した。林業、木材産業ともに厳しい状況が生々しく説明された。また、木材利用技術センターで、主としてスギ材の新たな利用に関する研究の状況を取材。さらに、杉集成材の製造をはじめ木材加工、広域森林組合、杉の大断面集成材を使用した日向ドーム、列状間伐による複層林の造成現場などを取材した。

会報「林政ジャーナル」はNo.31～33まで3回発行し、研究における講演をすべて報告した。

2003年度 活動計画

年間テーマを前年度に引き続き「森林と環境」とし、次のように決定した。

1. 研究会

年間テーマに沿って開催する。

2. 会報の発行

「林政ジャーナル」を年4回発行する。

3. 共同取材

年間テーマに沿って現地取材を行う。

4. 3木会

林政上の諸問題について林野庁幹部等と意見交換を行う。

5. 幹事会

できるだけ多く開いて、研究会及び会の運営について協議する。

6. 組織の拡大強化

会員の加入促進、会員相互の緊密化・円滑化に努める

7. 責任体制の明確化

会の運営を円滑化するとともに活性化するため、幹事の役割分担を決め、それぞれ責任を持って活動する。

8. その他

会の名称について、日本林政ジャーナリストの会の名称を、たとえば「森林ジャーナリストの会」に変更してはどうかといった意見があることから、その是非について1年かけて検討する。

幹事会報告

3月5日午後6時から、第1回幹事会を開き、会長、副会長、事務局長を互選した。その結果、次のように決定した。

幹事は総会で決定したとおり。

会 長 上松 寛茂

副会長 滑志田 隆

事務局長 吉藤 敬

幹 事

赤堀 楠雄 石井 健雄 石山 幸男

小野田法彦 梅崎 義人 児玉 洋子

高田 浩一 林 和彦 福井昭一郎

藤井 礼子 古野 雅美 斎藤 恵巳

監 事

森田 稲子 吉川比出夫

なお、高田浩一氏は会長として大きな功績を残されたので、顧問に推戴する予定。

副会長1名は当分の間空席とした。

2003年度 収支予算

収入の部

項 目	前 年 度 決 算 額	予 算 額	増 ▽ 減
会 費	1,019,000	1,068,000	49,000
個 人	469,000	518,000	49,000
団 体	550,000	550,000	0
雑 収 入	145,158	120,000	▽ 25,158
小 計	1,164,158	1,188,000	23,842
前期繰越金	1,134,925	1,166,780	31,855
合 計	2,299,083	2,354,780	55,697

支出の部

項 目	前 年 度 決 算 額	予 算 額	増 ▽ 減
研 究 会 費	245,725	320,000	74,275
講 師 謝 礼	245,725	300,000	54,275
会 場 費	0	20,000	20,000
3 木 会 費	0	10,000	10,000
会 議 費	249,965	280,000	30,035
総 会 費	249,965	270,000	20,035
幹 事 会 費	0	10,000	10,000
事 務 局 費	320,321	255,000	▽ 65,321
事務運搬費	0	10,000	10,000
共同取材費	47,000	20,000	▽ 27,000
通 信 費	172,957	180,000	7,043
事務用品費	17,339	5,000	▽ 12,339
印 刷 費	83,025	40,000	▽ 43,025
会報発行費	285,670	300,000	14,330
雑 費	30,622	13,000	▽ 17,622
予 備 費	0	10,000	10,000
小 計	1,132,303	1,188,000	55,697
次期繰越金	1,166,780	1,166,787	7
合 計	2,299,083	2,354,780	55,697

林業で美しい町づくり

参議院議員 岸 宏 一

2月19日に開催した第25回定期総会で、元山形県金山町長で、現参議院議員の岸宏一氏に記念講演をしていただいた。岸議員は、町長時代に地元産の木材を活用して、美しい街並みの景観を奨励するなど、林業と結びつけた町づくりを推進し、「美しい村づくりコンクールで」優秀賞を獲得したのをはじめ、地域振興に独自のアイデアを生かして大きな実績を残している。

林業の町・金山

「林業と環境」というテーマをいただきました。そのような話ではできませんので、山形県金山町の町長を27年間務めた経験から学んだことを中心にお話をします。皆様の参考になればと思っています。

私は、昭和15年に山形県金山町に生まれました。

金山町は、一度も町村合併を行わない自治体です。私は現在、総務省の大臣政務官を務めています。総務省は町村合併を推進していますので、「一度も合併したことのない町の出身ですから、町村合併の担当でなくてよかった」と挨拶したところ、現代という雑誌に「岸大臣政務官は町村合併の担当なのに町村合併をしない」などと、全然違うことを書かれましたので、嚴重に抗議をしました。

金山町は、林業の盛んな町と言ってもいいと思います。林業の形態が他地域と違いまして、大規

模山林所有者によってリードされてきた林業地帯と言っていると思います。山形県の林業としては特徴的な形態です。県内の60年生以上の杉のうち2割ぐらゐは金山町にあると言われているように、いわば大規模林家がしっかりと蓄積してきた。周囲の中小規模林家は、それを見習って、一種の林業地を形成した地域です。

金山町は、恥ずかしながら、50年にわたって岸という姓の者が町長を務めておりまして、面白いと言えば面白い。また、昔の日本が残っている町であります。

ある先生から「逝きし時の面影」という本を奨められました。非常に面白い本です。この本には、江戸時代末期から明治の初期にかけての日本を見た外国人の印象がたくさん紹介されています。

日本古来の文化や文明は、非常に良かったと言うことが書き連ねられています。現代の日本を考えたとき、大事なことをわれわれは失ったと考えさせられる本です。この本を読んで、私は金山町を皆さんに自慢したくなりました。

町村合併をしたことのない町ですから、人間関係が非常に濃密なものがあります。あそこの家とは100年も前からつきあっていると、あそこの家から私の家に子守に来てくれたから、大事にしなければならないとか、枚挙にいとまがない。

婚姻関係というか血縁が非常に濃密になって、非常に仲のよい家族的という印象の町です。

地元の木材で住環境を整備

町長になって、いろんなことを考えながら町づくりを進めてきました。私が町長に就任しました昭和46年当時は、木材価格が山元で6,70年生の杉が、1立方尺2万円以上していました。その当時は、林業が町の産業として一定の位置を占めていました。しかし、大山林所有者に集中していたものですから、林業として町づくりをすればするほど大山林所有者が得をするきらいがありました。

金山町は、大工が多かったものですから、大工を活かして林業をアピールすることを考え、木材をより多く活用した町づくりがひらめきました。

その後は、森先生（巖夫氏・当会顧問）などに町の政策顧問をお願いしまして、さまざまな手だてを講じてきました。最初は、大工さんに良い住宅を建築してもらうことを目的に、東京の芸大から講師を招いて、大工さんたちに勉強してもらい、住宅建築コンクールを行いました。一方で、公共建築にはできるだけ木材を使い、町民から見たらモデル建築にするよう心がけました。

金山町は、人口7千数百人の小さな町です。私が町長のときでも8千人ほどでした。その小さな町で、毎年20～30軒の家が建てられました。住宅はできるだけ金山町の杉を使い、周囲の景観とマッチするような建築にするよう大工さんを督励しました。コンクールでは、一等には最優秀賞として、10万円ぐらいの賞金を出しました。すると大工さんもいい建築をしようと一生懸命勉強します。マスコミにも取り上げられます。大工が新聞に載るのはたいへんなことです。大工さんはますますはりきって、さらに腕をみがくようになります。

そのうちに街並みが目立つようになりますと、

建設省（現国土交通省）から、地域の住環境を整備する「ホープ計画」を勧められ、よい計画だということで政策顧問の先生方、都市計画の専門家、地域住民と相談しまして、この計画を基に点であったものを面的に広げることにしまして、「街並み景観条例」を作り、街並み景観づくり100年運動を推進することにしました。

景観条例は一般的には、古い建築物を残したり、歴史的な街並みを保存するものですが、金山町の場合は新しくて古いと言ったらいいんでしょうか、伝統を生かした新しい町に作り上げていく。それで100年いきましょう。約2千軒ぐらいの世帯がありますから、1年に20軒ずつ建てていけば100年で2千軒になります。そしてきれいな町ができあがる。

標準住宅を設計してもらいまして、切り妻の屋根、白壁にする。地元の杉を使った場合、一戸当たり50万円まで補助します。車庫や生垣も補助の対象になります。50万円、40万円、30万円というように補助しますという新しい条例を作りまして、大工さんを督励しました。同時に、よそを見る必要があることから、大工さんや町役場の職員、森林組合の職員、一般の住民の皆さんをドイツへ毎年6、7人派遣しました。どこを見るかは自分たちで計画しなさい。もちろんドイツにいたことのある先生をお願いして、指導方々連れていただきます。現地視察で観光旅行ではありません。それを長い間実施しました。

ドイツでは、美しい村のコンクールがオールドイツで行われております。そういうことでドイツの農村は非常に美しいそうです。実は私はドイツへ行ったことはありません。これは農林省で聞きました。近藤元次さんという農林大臣がドイツへ行かれ、ドイツの景観の美しさに驚かれました。それで、国内で最初に美しい村コンクールを行いました。その第1回コンクールで、金山町は最優秀

賞になりました。

私は、近藤大臣に「賞状と盾だけでなく、なにかいいことをやってください」と言って、予算をつけていただいた記憶があります。近藤さんはすばらしい大臣だったと思っています。近藤大臣は八カ所ぐらい行きましたし、われわれの説明を全部聞いてくださいました。

そのようにして、町づくりの中に住宅だけでなく、林業と景観及び環境を整える事業を取り入れました。水路を石積みにしました。石積みの農業用水路を最初に造ったのは金山町です。当時の農林省は、農業用水路を造るのに石積みは絶対にだめだと、機能的なのはU字管だということでした。「美しいものを造りたい」と言いますと、「美しいと言うことは行政用語にありません」と言われました。

ところが、何年かしたら石積みの水路が農林省の外郭団体か何かのパンフレットに掲載されました。

石積みの農業用水路に鯉を放流するなど、美しい町づくりを進めてきましたが、町民の皆さんからは「町長のやっていることは道楽だ。お金にならない」という話が出てきました。それに対して「大丈夫だ。そのうちこの街並みが財産になって、必ず観光客が見に来るようになる」と言いました。お菓子屋の若旦那には「立派なお菓子を作っておけよ。お土産には売れるから」と言ったりしました。

そのような町づくりを進めて来ました。その結果さまざまな賞をいただきました。市町村に関する賞は、ほとんどすべてもらったと言って過言ではないと思います。

そうしますと、町民が自信を持てきます。自信を持てきますと、やろうという気が出てきます。いままで景観条例に従って「切り妻の家を造ってもらいたい」と言ってきた者でも、町長が

嫌いだからいやだという者がかなりいました。ところがみんなから褒めたたえられると、次第によいことだとわかってきます。そんなことで町の住環境はきれいになってきました。

全町公園化構想で美しい町に

金山町のような小さな町が、よその町よりもよい町だと言われるには、自分たちの持っている長所を伸ばすことが大事です。たとえば東京では学校を造っても、広いグラウンドは金がかかって買えません。田舎は土地が安いですから、広いグラウンドを確保できます。ですから私は、全町公園化構想を考えました。町全体が公園と言われるような地域にすることです。

最も力を入れたのは、町の中心部で売りたいという土地があれば、できるだけ町で買ってポケットパークのような小さな公園をたくさん造る。これは火事のときに防火帯にもなりますし、冬には雪捨て場にもなります。

芸大の先生方に公園を含めて、全部設計をしていただいて、次第に町がきれいになりました。しかし見学に来る人はおりますけれど、なかなか金にならないのです。森先生に相談しましたら、「町がきれいになれば必ず観光客が来ますから焦らないように」と言われました。

これが本当だったのは、J R東日本で美しい地域に簡単なホテルのようなものを造って、国内の観光を重視する事業を展開しているので、J Rと提携してみてもどうかというアドバイスを受けました。

金山町には鉄道が通っていないものですから、最初は、鉄道が通っていない町にJ Rがホテルを造るわけがないと思っていました。ところが異業種交流があると言われて、思い切ってJ Rにぶつかってみました。そうしましたらJ Rの山本さん

という常務が、10人ぐらい部下を引き連れて来てくれました。その日は秋晴れのすばらしい好天でしたので、しめた絶対にうまくいくと思いました。

それには縁起のよい前例がありました。15年ぐらい前のことです。民間の幼稚園を建てたいと思っていましたが、田舎ですから幼稚園を作る人がいません。それで人のつてをたよって千葉県の実子市の「めばえ幼稚園」の園長夫妻に、金山町に来ていただきました。そのときも秋晴れのすばらしい日でした。園長夫妻はすっかり気に入らして、幼稚園を開設することになり、現在も金山町でやっています。

手前味噌になりますが、民間活力の効用はその当時からやっていました。そのような経験がありましたので、期待は大きくふくらみました。山本常務は、「いいところだとうことは聞いていましたが、聞きしにまさるすばらしいところです」ということで、ホテルを建設することになりました。

失敗の経験を生かす

ホテルは第3セクター方式ということです。第3セクターでは、一度大きな失敗をしています。その失敗談をご紹介します。私は、木材に関する町づくりの方向で町の行政を進めていましたので、木材に関する工場の誘致を考えていました。

県から、大日産業という会社を紹介されました。LVLという単板積層材を、国産の針葉樹で作るということでしたので、その会社を誘致しました。単に誘致するだけなら、植民地と同じですから合弁でやりたい。金山町も資本金を出しましょう、大日産業も出資して下さいということで、資本金1億円の会社を設立しました。ところが試験操業をしている間に、親会社が倒産してし

まいりました。

林野庁では気の毒がって、原料は随契で供給して下さいました。林野庁の弱いところは、住宅産業まで手が回っていなかったことです。林野庁は住宅産業と密接な関係を持たなければいけないと思います。建設省は、製品を売ることに協力して下さいました。そうこうあって、20年ほど操業を続け、潰さずに廃業することができました。木材コンビナートのようなことを夢見ていましたが、うまくいきませんでした。話を戻します。

ホテルを建設するに当たって考えました。第三セクターでは失敗することが多い。JRは客を呼んでくる能力があるはずだ。だからホテルは金山町で造りましょうということで、全部町で造りました。それもお陰様で農林水産省の補助でできました。

資本金7千万円の会社を、JRと町とで設立しました。そうしましたら、うれしいことにお客が来るようになりまして、地場産業の林業と景観を重視した町づくりで、お金になる話によりよくなりました。町長の道楽と言われたことが、お金になるようになったころ、町長を辞めました。97人収容の小さなホテルに毎年1万人以上のお客さんが来て下さいます。

山村には日本のよい伝統が残る

金山町には観光資源がありません。しかし、不思議なもので美しい環境、美しいたたずまいを家族や仲間で見に来るというだけで、人が集まる町を作ることができました。そのことを考えますと、隔世の感がいたします。

美しい村づくりでありますとか、美しいという言葉が行政の言葉にたくさん出てくるようになりました。20年前にはなかったことです。ですから、元農林大臣の近藤元次さんは偉いと思いま

す。それより先に、美しい村づくりを進めてきた各村々、町々これはもっと偉いと私は思っております。

「逝きし時の面影」の中に、ヨーロッパ、アメリカの人たちが見た日本は美しい。美しい景観を持っている。それから、日本の国民の色彩感覚のすばらしさ、センスの良さに驚いています。

考えてみますと、パチンコ店のケバケバしい色彩だとか、ラーメン屋さんの看板だとか、さまざまな色彩に対する違和感を皆さんは感じませんか。

この本の中で、「日本人は白とか黒とかを主に使用し、ケバケバしい色を使わない。穏やかな色を使っている。われわれヨーロッパの人の感覚と何ら変わらない。今まで見てきたドイツやシャム、チャイナと全然違う。」と書いています。

もう一つは、「日本人は貧しいけれど清潔だ」、「なんて日本人は陽気なんだろう」ということも書いてあります。皆さん、いま東京で暮らしていて、日本人が陽気だと思いますか。「なんで親切なんだ」ということも書いています。東京で、日本人は親切だと思いますか。全然違うでしょう。われわれが持っていた、昔の日本人はそういうお国柄だったのです。外国人が書いているのだから、是非皆さんに読んでいただきたいと思います。

この本に出てくる、エザベラバードという人は、金山町にたまたま来られました。そこで、「金山町はすごく美しい町だ。ロマンチックな町だ」と書いています。そしてこういうことも書いています。「この金山村で旅行中初めて村長が挨拶にきた。村長が挨拶にきたのは金山村だけだ」と。もう一つは、「初めて鶏肉をご馳走になった。そうして、どこへ行っても物見高い人ばかりで、秋田県の湯沢町などでは、寝ているところを覗きにきた。この金山村だけは村長に頼まなかったの

に、朝、出発するときにだれも見に来なかった」ということを書いています。そういう日本人のDNAが少しでも残っているのは山村です。

目に余る山村の崩壊

平成13年度の林業白書にもありますように、山村の崩壊は目に余るものがあります。都会の人口は30%増えましたが、山村の人口は30%減っています。高齢化率は全国平均で15%ですが、山村は24%になっています。30歳代前後の人たちが6割も減っています。なぜでしょうか。農業と林業が衰退したからです。このところを私たちは考えなければいけないと思います。

山村の農業をみますと、全国で262万㍊の水田があります。しかし101万㍊は休耕田で、転作を強いられています。今年はさらに5万㍊増やさなくてはいけない。しかも20万㍊ほどの耕作放棄地が、日本中にあります。耕作放棄地というのは、たんぼを耕作しないで出ていってしまったからです。するとどうなるかと言いますと、そこにススキが生えてきます。秋になるとススキが枯れて、子供たちが火遊びなどをすると火事になってしまふ。山火事にもなりかねない。

農林省は、いまどうしているかと言いますと、中山間地に直接支払いを実施しています。傾斜地100分の1、100㍊で1㍊高くなる。そういう中山間地の農地をはじめ棚田といったところに、直接支払いすることによって、少しでも農家のみなさんを農山村にとどめて、林業や農業、環境を守っていかなければならないことを、農林水産省は明らかにしました。その金額は年間500億円です。それでもまだまだ大変です。

林業でも、平成14年度から1㍊当たり1万円を林家の皆さんに支給する方策を実施しました。これは直接支払いという意味では、非常に大きな一

歩だと思います。金額はトータルで200億円ぐらいですから、林家の収入という点ではまだまだです。ことほどさように山村の皆さんが困っているということは、私が説明するまでもないと思います。

杉の値段にしましても、冒頭に申しあげましたように、昭和47、8年には立方尺当たり2万円を超える値段で売れていたものが、今では、7千円ぐらいです。当時の30%まで下がっています。山で働く人たちの人件費はどうかと言いますと、180%だそうです。それを考えただけでも、林業の大変さは説明するまでもなく、十分わかりいただけると思います。

環境へのアプローチが重要

今われわれが期待していますのは、直接支払いと同時に環境面でのアプローチだと思います。COP3で決められた森林吸収率3.9%を達成するには、どうしても間伐実施面積を、現在の30万㍍から35万㍍ぐらいに拡大しないと、国際約束を守れない。ですから、そうすべきだということを国民に説得できるのです。そうでないと、林業が大変だから間伐の予算を増額して下さいと言っても納得されません。COP3の3.9%という森林吸収率を実現するために、間伐を進めなければならない。また、林道網を整備するために予算をつぎ込む。

外材との問題では、日本の国産材の自給率は18~9%です。値段は外材のほうが高いのではないですか。なぜそうなったかと言いますと、大手の住宅メーカーが、さまざまな種類の木材を大量に注文して、すぐに入手できるのは外材だということで、国産材は嫌われるということがあります。

生産性からいっても、日本は工場が小さくて、アメリカなどに比べて問題にならない。このよう

な点での合理化を進めなくてはならない。それに、木材の乾燥を徹底的にやるのが大事です。林野庁は、木材乾燥の助成に着手しました。そういうことを積み重ねていっても、林業に未来はあるかという、やはり環境面でのアプローチがなければ難しい。絶対に難しいと思います。

高知県で、森林環境税を実施すると言うことです。これは快挙だと思います。こういうことを国民が理解していくことで、なんとか国の重要な森林・林業を守っていけると思います。

最後に、天皇陛下のおことばを解説したいと思います。

去年、金山町で全国植樹祭を行うことができました。大変な感激でありました。立派な植樹祭だったと思います。そのとき、天皇陛下がおことばを述べられました。このおことばが、普通よりも長かったと私は思いました。私がすばらしいと思いましたが、山に対する理解が非常に深いおことばでありましたし、最後のほうで間伐など手入れのゆきとどかない森林は重要な木材の生産に支障を来すばかりでなく云々とありまして、ここが重要なところです。「今日過疎化の進む山間地においては、特に活力ある森林の育成に、多くの人々の協力が求められています。」ということ、天皇陛下が深い問題意識を発表されたことだと思います。これは林野庁の皆さん、財務省の皆さんもしっかりと受け止める必要があると思います。そこで私は、塩川財務大臣に陳情に行きまして、天皇陛下のおことばを大臣に見せました。そのときは大臣は深い理解を示されました。

私たちは、重要な問題を抱えていて、しかもお集まりの皆さんは、そういった問題を解決するための大きな力になり得る方々ですので、山村の重要性を訴えていただけるようお願いを申し上げまして、つたない話を終わらせていただきます。

ありがとうございました。

宮崎県内共同取材の報告

杉材の利用と苦境の林業

2002年度の共同取材は、11月13日から15日まで、宮崎県の林業と木材産業を取材した。林業は苦境のまっただ中であって、先行き不透明のなかで苦闘している若手経営者たちの生の声を聞くことができた。木材産業も厳しい経営が続いている。そうした中で、製材から乾燥、集成材などの二次加工、さらに住宅まで一貫した経営を行っている大手木材企業の活気に満ちた操業に明るさを見ることができた。この会社はこれからの木材産業のあり方を示唆しているように思える。

また、宮崎県の森林の大方を占めるスギの活用に関する研究、その成果としてのスギ大断面集成材の開発と実用化には目を見張るものがあった。

初日、空港から都城へ直行。宮崎県がスギの利用拡大を目的に設立した「木材利用技術センター」を訪ねる。

平成5年から試験研究を開始。年々設備が整備されていることがわかる。同研究センターは、スギを中心とする県産材の効率の活用と需要拡大を目指して、木材関係産業の技術の向上、新製品の開発支援、木造住宅の新構法の開発に向けて①材料開発部、②木材加工部、③構法開発部で構成されている。

現在は、スギをラミナ（芯になる板）にした集成材は実用化しており、接着剤を使わない集成材の研究を積極的に進めている。すでに同センターの建物は接着剤を使わず、木製のダボ（くさびのようなもの）で板を張り合わせた大断面集成材が構造材として使用されている。スギがヒノキなどに比べて強度が不足しているといわれ、欠点とされている点を補って強度を高める製品や弱点を利用した製品の開発なども進められている。強度を

高める製品では、特殊の薬品を用いて圧縮して固め、これまで不向きとされていた根太（住宅の床を支える材料）に使える製品が実用化している。

製材から住宅まで一貫して手がけている木脇産業、飢肥杉の展示林となっている「三ツ岩学術参考林」を視察。夜は、地元のリーダーたちから取材した。

若手の林業、木材企業経営者は異口同音に厳しい現状を訴えた。製材と素材生産を行っている人は、「立木を買いに行くと土地まで一緒に買ってくれ」と言われるという。この一言は、林業に希望を失っている林家の苦悩を端的に物語っている。

二日目は、飢肥杉の造林地を眺め一路宮崎市へ。県庁で松形知事を表敬。知事から宮崎県産のスギを中心に中国へ年間100万立方メートル輸出する覚書を福建省当局との間で締結したことなどを取材する。

耳川木材加工団地、耳川広域森林組合でスギの大断面集成材の加工工場並びに関係者からの取材。ここでも、不況下での厳しい話を聞く。しかし、木材産業関係者も森林組合関係者も、展望を切りひらくために前向きに悪戦苦闘している姿に感動を覚えた。

三日目、日向市に完成した「日向ドーム」を取材。スギの大断面集成材で建築したドーム。湾曲大断面集成材を間近に見てその大きさに目を見張る。続いて諸塚村を取材。自然豊かなすばらしい山村だが、現実の厳しさを肌で感じる。

列条間伐の現場を取材。陽光を受けやすく東西に間伐してその跡スギやヒノキを植えて複層林に仕上げる工夫だ。

目を見張る杉の乾燥技術

進む集成材や狂わない材生産

高田 浩一

わが国の代表的な樹木である杉が先端をとがらせて山肌を覆い、製材工場では杉の乾燥施設が急ピッチで整備されムク材や集成材の生産が拡大している……宮崎県の森林・木材業界を訪れての第一印象である。

県産の杉で巨大建造物が続々

驚いたのは、木造の巨大な建築物が最近、県内に次々に登場していることだった。しかも急ピッチに出現している。2000年に日南市に野球ができるような「おびすぎドーム」ができたのを皮切りに、2002年には日向市と南郷市にそれぞれ同じような木造の大ドームが完成、オープン。また、西米良村には車が通る長さ140㍍の木の長大橋を工事中で、2003年には完成の見通し。さらに、県都宮崎市にも野球ができる木造ドームが計画されているという。すべて材料のほとんどが県内産の杉である。このほか、学校や集会所などの大規模な木造の公共施設の建築が相次いで誕生している。

私たちが共同取材で見たのは日向市にある「サンドーム日向」。今年(2002年。以下同じ)6月にオープンしたが、タテ70㍍、ヨコ60㍍のの広さ、天井までの高さが25㍍。中で野球やサッカーができる。個々に使われているのが杉の集成材だ。柱や梁(はり)の構造材にたっぷり使用されている。とくに屋根を支える梁は、何本も横にアーチ型で設置されているが、各その厚さは171㍉で、

ラミナと呼ばれる厚さ約3㍉の板を57枚も重ねて造られている。梁1本の長さは15㍍で、それを5本つないで60㍍のスパンにしてある。このほか、床や壁などにも木で、全部で杉910立方㍍、本数にして1万5000本以上が投入されているそうだ。

こうした杉の集成材による大建造物が次々にできているのは、県北の耳川木材加工団地内にある宮崎ウッドテクノ株式会社が平成9年(1997年)にスタートしたのが大きい。同社は断面集成材工場で、地元の森林組合、市町村などが主な株主だが、水準の高い愛知木材と斎藤木材(長野)の2社が入っているのが注目される。さらに、全国的にもまれな存在とされる宮崎県木材技術センターの技術的に高度なアドバイスがあるのだろう。

杉の集成材の特徴は、①米材より比重が軽い。製品も軽い、②強度は同じ大きさでは劣るが、構造計算でカバーできる、③基礎部分にかかる費用が少なくすむ、④現場での施工が楽、などという。ウッドテクノ社によると、「ドームは100年以上もつ」といい、巨大建造物群の出現は杉の集成材利用の大きな“はずみ”になりそうだ。

集成材に杉が使われるようになったのは、難点とされた乾燥の問題を克服する目途がついたからだろう。製材所に乾燥施設が増えており、以前からあった57基に加え、新たに3カ年計画で来年度まで110基の乾燥機を設置する。そうなると、杉

の生産全国一を誇る同県で、一年に生産される製品80万立方㍎のうち、3割の24万立方㍎にのぼる構造材を、すべて乾燥できる態勢になる。また、乾燥の技術を木材利用技術センターが一段と磨きをかけている。かつて80度、10日間の乾燥が普通だったが、いまは120度、6日半ですむようにした。

全国有数の木材の生産県だけに、民間の技術水準も高い。共同取材で見た都城市の木脇産業は、製材工場として年間5万立方㍎を挽く全国的にも有数の規模だが、規模の大きさだけでなく、いち早くプレカット、乾燥、防虫、防腐を手がけ、製品の曲り、腐れ、割れをクリアし均一化した各種製品を大量に供給する体制を整えた点が注目される。いわば平成12年度に施行された「品格法」の流れに沿っているのだろう。人が忙しそうに動き、機械がうなりを立て、工場内は活気にあふれている。とくに、先端を行くと思われる乾燥技術はすばらしい。杉材の中でも水分を抜くのが難しいとされる黒芯ですら、高周波や加圧を用いた乾燥機（ドイツ製）で水分を抜くことができるという。また、柱材は初めに重さで3段階にオートメで分け、その後で処理して行く。重いのは水分が多いのであり、含水率になるだけ同程度になるようにする仕組み。この後、木材を乾燥機にかければ、割れを防げるし、無駄なエネルギーを省くことができるからだ。このほか、板材の塗料に植物油を使い、板の吸湿機能を残すような配慮もされる。全国のプレハブメーカー、問屋に販路を拡大しているという。

400年の歴史の「飢肥林業」

川上の印象も強い。宮崎県には約60万㍎の森林があり全国有数の「山国」だ。人工林は61%、約36万㍎。森林全体の7割、40万㍎余が民有林。こ

の人工林のうち、杉が73%と圧倒的に多く、ヒノキ、マツなどがある。この杉の中心が「飢肥杉」だ。県内の杉の90%がこの飢肥杉系統と言われる。その中心的な存在が県南の北郷町の国有林にある「三ツ岩林木遺伝資源保存林」。現在、5㍎ほどに古木1,184本がある。樹齢は125年といい、胸高直径が平均で76㍎、大きいのは1㍎もある。樹高が36~37㍎。林内に入ると、荘厳というのかやはり歴史の重みを感じる。標高1,100㍎の山を背にした、おわんの底のような形状のところで、雨量が年間3,400~3,600㍎もあって、杉の生育に適し、台風の被害が少なかったので群として残ったのだろう。これらの古木はいまでも成長を続け、樹高が年間5~6㍎伸び、幹の肥大が年間5㍎ほどあるそうだ。

ここの木に限らず、全般的な飢肥杉の特徴は、①肥大成長に優れ弾力性に富む、②樹脂を多く含んでいるので水を吸収することが少なく腐りにくい、③節は多いが、粘着力があるので抜け節が少ない、④樹脂が多いのでシロアリがつきにくい、など。軽く弾力性があり曲げやすく、樹脂分が多いため、かつては船の甲板に使われ「弁甲材」と呼ばれ、国内はもとより韓国、中国などに輸出された。今は船も代わりにプラスチックや鉄板を使うようになり、この面の需要は急減。一般の建材に使われる。かつては疎植で1㍎当たり1,500本ぐらい（昭和初期は1,000本以下も）だったが、もっぱら建材用になってからは他地域と同じく2,000本~3,000本植えになっている。

この一帯を「飢肥林業」と呼ぶ。つまり、宮崎県の東南部に当たり、日南、串間両市と宮崎市の一部、北郷、南郷、清武、田野各町からなる。年間降雨2,600㍎、温暖多湿な気候。森林面積は約6万5,000㍎。驚いたのは、林業の歴史が400年前から始まっていることだ。全国的にも5指に入る歴史だろう。飢肥林業は、飢肥藩の家臣たちが藩



オビスギ人工林

財政の立て直しのため1623年ごろ「さし木」で飢肥杉を植林したのが始まりと伝えられる。藩の土地に植林し、伐採した時に藩と民と半分ずつ分け合う「2分1法」が早くから行われ、同林業の特色の一つをなし、今日の分収造林の起源とみられている。また、やや時代は下がって飢肥藩の植木方として野中金石衛門（1768～1846年）が生涯を植林に捧げ今日に至る飢肥林業の基礎を築いた。これを記念して、今でも毎年2月に野中翁顕彰市売会が開かれているという。

中国へ木材輸出スタート

宮崎県の県民性の一つは、協調性が強いことだ。戦後の観光ブームの盛り上げにもみられたが、いま、林業界で、県北に平成12年に誕生した全国最大規模の耳川森林組合にもそれを見る。組合員数6,384人。組合員の所有森林面積が10万8,800㍍で森林組合の中で全国1位であるほか、年間の事業総取扱高（約69億円）、造林造成事業取扱高（約28億円）、素材取扱量（15万立方㍍）、製材品取扱量（3万5,623立方㍍）、いずれも全国1位の堂々たるものである。大規模組合になって、「作業道をつくる重機やオペレーターが調達しやすくなり、高性能機械の導入も容易になった」と関係者は言っている。生産効率を上げ競争力の強化が図られた。ただ、行政の指導・助成のもとに実現しただけに、今後、組合自らの顧客の

安定化など地道な努力が必要だろう。

最後に、ちょうど共同取材で訪れた時に公表された同県と中国福建省との木材貿易に関する覚書締結。分かりやすく言えば、同県などから年間100万立方㍍の木材の輸出をめざす内容という。民間での取引に対し、行政サイドの覚書で裏打ちした形。2年越しの交渉の成果といい、中国では4年前におきた揚子江の大洪水の被害の反省から、いま上流域は木材を禁伐、レンガも焼くのに薪を燃料に使うためレンガ造りの家は禁止され、新築は鉄筋コンクリート建のマンションが多い。そのため、せめて内装は木をという需要が強まっており、大量輸出が実現しそうな状況。同県は「年間5,000立方㍍程度から始め、いずれ上海や北京へも売り込みたい」と抱負を語る。

森林・林業に対する同県の取組は全国的にみて最も手厚いランクに入ると思う。それは6期にわたる松形知事によるところが大きい。今回は訪問できなかったが山間に中高一貫の進学校をつくったり、林道・作業道を年間200～220㍍開設し続けたり、高性能機械のリース事業をしたり、森林・林業のため、多くの施策を展開された。元林野庁長官であり、「山村問題の取組は、全国的に自分をおいてない」という自負があると伝えられ、林道密度日本1、スギ生産日本1、高性能機械の導入も北海道について2位になるなど、その手腕による“果実”が続々、出現している。